

はじめに

UTaTanéにとって、今回は、6回目の五月祭で、駒場祭も合わせて11回目となる学園祭である。来場して下さるみなさんの一人ひとりと、「人と人とのつながり」や、「人と科学・学問とのつながり」について、ともに考えることを楽しみに準備を重ねてきた。UTaTanéのメンバーのそれぞれの個性豊かな発想が集まり、まざりあって作ってきた空間に、ぜひご参加いただき、みなさんの色を重ねていただければ嬉しい限りである。

UTaTanéでは、毎年、テーマを決めている。今回も12月から、4か月以上をかけて、メンバー総出で、今みなさんと一緒に考えたいことを探り、「まざりあう世界、変わりうる私 ～きみとともに、科学とともに～」に決定した。本稿では、このテーマのもとに考えていることをご紹介します。ぜひ、会場の展示にご参加いただいてから、覗いてみていただければ幸いです。

もちろん、ここに書かれていることは、代表ひとりの考えに過ぎない。UTaTanéメンバーそれぞれが語る今年のテーマには、ここに書かれていること以外にも、いろいろな広がりがあるだろう。特に本稿では一言ずつ各展示に触れているが¹、それはあくまでも、現時点での私の捉え方に過ぎないと明言しておきたい。

一方で、私が書いているとはいえ、私が今考えていることは、けっして私だけの頭の中で生み出されてきたものではないようにも思う。団体内で議論を重ねるなかで、私の今の興味や考えは、ときに揺らぎ、ときに変わり、だんだんと形作られてきた。今の私の思考は、団体メンバーの一人が欠ければ別のものになっていただろう。ここでは、まさに「まざりあう世界」のなかにいる私の視点から、今年のテーマについて言葉を紡いでみたい。学園祭当日深夜のほとんど読み返すことすら叶わない走り書きではあるが、来場いただいた皆さんが問いを深めていく足掛かりに、そしてUTaTanéのメンバーの考えがまざりあう起点となることを目標に書き残してみることにする。

¹ 展示名を記載するときには、下線を引いて示した。

ぼくときみの「違い」の先

まずは、今年のテーマができるまでの道のりを、振り返るところから始めよう。昨年度のテーマは、「ぼくの世界、きみの世界～違いを感じ、科学を見つめる～」であった。一人ひとりの違いを体感するところから、違いを前提に、人や科学と関わる方法を見出すことを目標にしていた。それは、今もまた、私たちの通底を流れている。

しかし、昨年度を過ごすうちに、「違い」の先を考えてみたいと、考えるようにもなった。先とは何を指すだろう？「違い」に着目するだけでは捉えきれなかったところは何なのだろう？

捉えきれなかったことの一つは、違いを感じることから、つながりをつくること、関わり方を見つけることの間ギャップだろう。違いを感じただけでは、つながりをつくる方法が見出されない。差異があるなかでどうするか、という問いの、「どうするか」の部分をもう少し精緻に問い直す必要があると言い換えても良い。

そのギャップは、部分的に共通していることや似ていることに着目することで、少しは乗り越えられるものかもしれない。本学副学長の文化人類学者、森山工は、教養学部報で、自身のマダガスカルでのフィールドワークの時の経験をもとに、「差異と類似」について語っている²。マダガスカルの村人たちが、時には圧倒的な異質さをもって現れ、時には自らと地続きの存在として感じられた経験をもとに、同質性も異質性も部分的であると認識することの重要性を語っている。部分的であるからこそ、コミュニケーションをとる契機がひらかれる。私たちは、昨年度、「差異」（違い）に注目していたが、**類似や同質性は、つながるための足掛かりになるのかもしれない**³。

私たち UTaTané が長く扱ってきたコミュニケーションを主題とした展示のなかでも、今回の五月祭では、先に述べてきたような、類似や共通性を扱っているといえるだろう。たとえば、「『人物像』を見つめる」という展示では、「他者を見る眼差し」を、他者像と自分や身近な人の類似の観点から分析していく。他者の人物像を形作っていく時、もしかしたら、私たちは類似を無意識的に見出そうとするのかもしれない。

² 森山工(2021)「差異と類似のはざま あるいはマダガスカルで骨折するということ」教養学部報第 635 号 <https://www.c.u-tokyo.ac.jp/info/about/booklet-gazette/bulletin/635/open/635-01-2.html> (閲覧：2023年5月13日)

³ 「ぼく」と「きみ」のような極めて近い距離であれば、類似は暗黙のうちに了解されており、差異を意識することにとりわけの意味があるかもしれない。しかし、やはり、近い関係性であったとしても、どのような意味で、どこが共通しているか、同質であるかの詳細は自明とは限らず、それを捉えることは裏側の差異を探る上でも重要であるように思われる。

また、「ことばをかたどる」という言葉にならないものを粘土で表出していく展示では、他の人と一緒に体験を行っていただくことに強いこだわりを持っている。一緒に同じときを過ごしていると感じられる場をつくってみることは、展示の目標の一つでもある。また、「隣に人がいること」が自身の作品に何か働きかけ、変えてくるような感覚を覚えた方もいるかもしれない。まざりあう世界には、相互に変わる契機が潜んでいる。

他には、「違い」への着目では捉えきれなかった点として、「**逃れられなさ**」が挙げられるように思う。極端に言えば、違いを見出すだけでは、違いを感じる人と離れるという選択肢もありうる。しかし、私たちは、実際には、それでも関わり続けなければならないなかでいかに関わるか、を考えなくてはならない方が多いだろう。

人との関わり方の逃れられなさは、たとえば「思ったことが言えない」という展示のなかでも扱われている。他者との感じ方、考え方の違いや抵抗を感じ、それでも関わりを続けなければならないからこそ「**思ったことが言えない**」、モヤモヤした思いは問題になるように思われる。関係性を終わらせられるのであれば、言えなくてもその後に支障がないかもしれない。

このような、「違い」を強調する議論では扱いきれずにいた、**類似性や共通性からつながりを探っていくことや、逃れられなさという前提を、今年のテーマは拾い上げようとしている**。類似があるからこそ、まざりあうことができる。まざりあっているからこそ、つながりを断ち切れず、逃れられない。

当たり前とされがちなもののなかに潜む、まざりあい

ここまでは、とりわけ人と人との個人のつながりに、着目し、差異に着目した昨年度から、今年のテーマへの流れを辿ってみた。「まざりあう世界、変わりうる私」のテーマのもとで、もう少し視点を引くと「**より多くの人とのまざりあい**」を考えてみたくなる人もいるかもしれない。

今回の五月祭のいくつかの展示では、「**多くの人やもののまざりあい**」の結果として一見「**当たり前**」のように思われる**事柄**について、立ち止まって考える体験をつくっている。その名も、「『当たり前』は誰のもの？」では、現代の日本で、おそらく多くの人が、当然守るべきだと考えているような規範をとりあげ、「**当たりの形成**」を考える展示だ。なぜ守るのかをいくつかの観点から評価してみたり、それを守らないとしたらどうい背景なのかを考えてみたり、さまざまな角度から思考をめぐらせていく。当然視され

ることの形成過程を探っていくと、それがさまざまな要素の絡まり合いのなかで生まれてきており、所与のものではないかもしれないことが見出されるだろう。この展示を体験いただいた方のなかには、「当たり前だと思う理由を説明しきれない」感覚を覚える方も多いかもしれない。それは、むしろ**単一の理由に帰すことのできない、現実世界のまざりあい**を示しているように思う。

「わたしの『客観』、みんなの『客観』」という展示では、日常で、当然のように正しさの代名詞のように使われることすらある「客観性」の中身を解体していく。集まったワークシートを眺めればおそらくわかるように、ひとつの言葉「客観」で表される内実は一つではない。私たちの「客観」のなかには、さまざまな文脈や意味がある。言い換えれば、それらがまざりあったものの総体を、私たちは客観と呼んでいる。

所与とされがちなものの中に、**単一とみなされがちなものの中に、潜んでいる「まざりあう世界」を、展示を通して捉えてみたい。**

技術やモノとのまざりあいと自由

さらに話を広げると、「まざりあう」のは、人と人の世界だけではないのだろう。私たちは、多くの人間以外の存在からも多くの働きかけを受け、またそれに対して働きかけている。なかには、突飛なことが書かれているように思う読者もいらっしゃるかもしれない。ここでは、オランダの技術哲学者フェルベークの著作『技術の道德化』⁴の議論に力を借りて、人と技術やモノとの関わりを考えてみたい。

私たちにとって、技術とは、何かをするための道具としてあるだけだろうかという問いを考えてみる。具体的に言い換えてみよう。包丁は食べ物を切るための道具であり、Zoomは離れた人と音声とビデオで話すための道具であり、病気の検査技術は病気を調べるための道具であると言える。しかし、技術がしているのは、このように選択肢をひとつ単純に増やした「だけ」だろうか？

フェルベークは、**技術が単なる道具にとどまらず、能動的に人の行為を方向づけている（=人の行為を媒介している）**と論じた。フェルベークが、頻繁に例にあげるのは、胎児の性別や先天性の異常などを調べる「超音波検査技術」である。超音波検査技術は性別や染色体異常を知ることができるようになる。しかし、単にそれができるようになっただけではない。映像として可視化されることによって、胎児が一人の人のように扱われるよ

⁴ フェルベーク (2015=2011) 『技術の道德化』鈴木俊洋訳 法政大学出版局

うになる。また、出産前に先天的欠陥を知ることによって、「子供を選ぶ」という状況が発生することになる。さらに、超音波検査を受けることが当たり前とみなされる社会では、受けないという選択が、すなわち意図的に障害・病気を持つ子供を持つリスクをとったことを意味するようになる。超音波検査技術は、「子供を宿す」ということの性質を、根本的に変えている。一方、技術がそのように方向づけるのは、人が使うからに他ならない。**技術と人は、まざりあい、一体となって、行為する。**

ただし、技術に私たちの行為が媒介されていることは、私たちが技術の支配を受け、なすすべがないという悲観的見方につながるわけではないことには注意が必要である。私たちは、**媒介を受けていることを前提に、技術とのよりよい関係性を築いていくことができる自由を持っている**とフェルベークは述べている。

この「関係の築き方の自由」は、私たち UTaTané が、今年のテーマで「**変わりうる私**」の二文字にこめた意味のひとつにつながるだろう。**まざりあうなかで影響を受け、変わっていく側面がある一方で、そこには変わらない自由も、守りたい何かを守る自由もある。**

今年の五月祭では、技術とモノをそれぞれ展示で扱っている。「技術をさぐる」では、まず、技術が何をもたらすかを考えること、つまり技術とわたしたちのまざりあう世界を捉えることを意図した。その上で、その技術とどう付き合うことができるかを考えること、つまり変わること、ときに変わらないことを選び、技術とのよりよい関係性を探してみたいと考えている。「ねじねじモノづくり」は、ごく身近な日用品の見方を、発想豊かに転換していく体験である。この展示の面白い回答には、モノを捉える上での軽やかさのようなものを感じさせられるが、それはモノとの柔軟な関係性を築くことにも役立つのかもしれない。

科学コミュニケーションという活動

さて、本稿をまもなく閉じるにあたって、最後に、私たちの活動が何を目指しているのかを、今年のテーマに絡めて、簡単に書き残しておこうと思う。

「科学や学問との新たなつながりをデザインし、実践する」と理念に掲げている UTaTané の活動は、広義の科学コミュニケーションと呼ばれる活動だ。科学コミュニケーションは、ひとつの言葉で表すのが困難に思われるほど幅が広いが、そのよく語られる目的の一つに、**科学技術に関わる社会的意思決定への市民の参加機会を確保することが**

挙げられる。従来のこのタイプの科学コミュニケーションの議論では、多くの場合、科学に対して何かを語りたい人、意見を言いたい人が想定されているように思われる⁵。

しかし、私たちは、「あなたの意見や希望を話してください」と言われれば、「話出せる」ものなのだろうか。自身にこの言葉が向けられたとしても、私のごく素朴な感想を述べるなら、「少なくとも簡単ではない」と感じてしまう。

現代文化人類学者のモルは、糖尿病外来での調査を軸にした著書『ケアのロジック』において、このような自律的な人間像（モルが題材としたことの中では患者像）の限界を論じている。物理的条件の制約をもものともせず、自律し、個人の意思によっていかなる選択肢も選べ、その意思の通りに行動できる患者を想定する「選択のロジック」では、コントロール不可能なことに立ち向かうことができない。生活の物理的な条件のなかで、ままたまらない生を生きる患者とともにより良い生き方を探ろうとする「ケアのロジック」が必要であると、モルは論じる。

医療現場を離れても、このような捉え方は有効なように思われる。今までに今年のテーマのなかで考えてきたように、**私たちは人やものとのまざりあい、関わり合いのなかで日々を暮らしている**。患者が物理的条件から切り離されていないように、**私たちもまた、多くの人やものから逃れられない**。

だからこそ、科学コミュニケーションにおいても、モルが完全に選択できる人間像を批判したように、**何かを話し出し、明確な意見を述べる**ことが、**何もせずとも可能な人間像を前提としないことも必要だ**と私は考えている。体験を通じて、一緒に言葉を探していくような科学コミュニケーションを、展開していきたいと考えている。たとえば、「科学のパッチワーク」で遊んだ方は、色を最初は直感で選び、そのあとに選んだ理由を探って言葉にしていく経験をした方がいらっしゃるかもしれない。ここで、科学に対する思いや意見やイメージをその場で探ってみていただきたいと思う。

また、ともに言葉を探りつつ、一方で、**言葉にしていくことの落とし穴にも注意を払い続けていたい**。鷺田清一は、私たちが、言葉を紡いでいくときに、複雑で語りにくいとき、苦し紛れに、滑りの良い、分かりやすい言葉に飛びつきがちであること、それに耐え

⁵ 本当は専門領域に近いので、まともに文献を示したいところであるが、夜が明けそうなので、精緻な議論はまたの機会としたい。このタイプの科学コミュニケーションの必要性は、イギリスでBSEやチェリノブイリ原発事故後に、科学への信頼が失墜したことを契機にはじまっている。ただし、欧米では反科学の傾向がそれなりにあるが、日本では無関心の傾向が強いと言われており、欧米の科学コミュニケーションの輸入では必ずしも通用しないだろう（このあたりは、岸田一隆「科学コミュニケーション論」等を参照されたい。）。

て「ぐずぐず考え続けること」の必要性を訴えている⁶。まさに、五月祭展示の「言葉の裏側」は、ある言葉がその言葉がさし示している事象の一面を切り出して、思考を方向づけていることを取り扱った展示だ。分かりやすく一語で説明できたと思ったとき、そこでは他の側面の捨象が生じている。そうした言葉の魔力に逆らいつつ、ともに言葉を探し出しつつ、そして同時に言葉で捉えきれないことも大切に抱いていられるような場を、私は皆さんと一緒に作ってみたい。

おわりに

まもなくこの文章を終える。展示にご参加いただき、そして長いまとまらない文章にここまでお付き合いいただいた方には、多大な感謝を申し上げたい。

最後に簡単にまとめると、私たちが考えたかったことは、多くの人やものと互いに関わり作用しまざりあう状況のなかで、私たちは、どのように人や科学と、よりよい関係を築くことができるか、という問いである。ぜひ、展示会場を出た後も、一緒に考えて行っていただければ嬉しい。

Reference

*注に示した文献を、書籍のみ末尾にも記し、会場内に置いてあります。興味があるものがございましたら、ぜひお手にとってご覧ください。

A.モル (2020) 『ケアのロジック』田口陽子・浜田明範 訳 水星社.

P.P.フェルベーク (2015) 『技術の道德化』鈴木俊洋訳 法政大学出版局.

せんだいメディアテーク編 (2023) 『つくる<公共>50のコンセプト』pp.44-47 岩波書店.

⁶ 鷺田清一 (2023) 「わかりやすいはわかりにくい ぐずぐずする権利」せんだいメディアテーク編 『つくる<公共>50のコンセプト』pp.44-47 岩波書店.